「源氏物語」より　第二十二帖「玉鬘（たまかずら）」

中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具など、いと二なくて、

例の、壺どもに、唐の薫物、心ことに香り深くてたてまつりたまへり。

御方々、皆心々に、御装束、人びとの料に、櫛扇まで、とりどりにし出

でたまへるありさま、劣りまさらず、さまざまにつけて、かばかりの御

心ばせどもに、挑み尽くしたまへれば、をかしう見ゆるを、東の院の人

びとも、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、訪らひきこえたまふべ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　花散里（人名）

き数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうもの

うるはしう、さるべきことの折過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの

御いそぎを、よそのこととは聞き過ぐさむ、と思して、形のごとなむし

出でたまうける。

あはれなる御心ざしなりかし。青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とか

や、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御

小袿と、よき衣筥に入れて、包いとうるはしうて、たてまつれたまへり。

御文には、  
「知らせたまふべき数にもはべらねば、つつましけれど、かかる折は思

たまへ忍びがたくなむ。これ、いとあやしけれど、人にも賜はせよ」

と、おいらかなり。殿、御覧じつけて、いとあさましう、例の、と思す

に、御顔赤みぬ。

「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、引き入り沈み

入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」とて、「返りことはつか

はせ。はしたなく思ひなむ。父親王の、いとかなしうしたまひける、思

ひ出づれば、人に落さむはいと心苦しき人なり」

と聞こえたまふ。御小袿の袂に、例の、同じ筋の歌ありけり。

「[わが身こそ恨みられけれ唐衣　君が袂に馴れずと思へば](http://james.3zoku.com/genji/genji_term29.html#wagamikosouramirarekerikaragoromo)」

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫深う、強う、堅う

書きたまへり。

（現代語訳）

中宮からは、白い裳、唐衣、その他の装束、髪上げの用具一式など極上のもので、いつものように壺に唐の薫物の香りの深いものが添えられていた。  
ご婦人方は、皆それぞれに、玉鬘の装束、お付きの女房たち用のもの、櫛や扇までそれぞれに用意なさるものは、優劣がつけられず、これほど源氏の寵を受けたご婦人方が競ったので、どの品もすばらしかったが、末摘花や空蝉が住む東の院にもこうした準備は聞こえていたけれど、お祝いする数にも入っていないので聞き過ごしていたが、末摘花は変に折り目正しくて、このような時を見過ごさないのは昔気質で、どうしてこのような支度を見過ごせようかと思って、決まりどおりに用意された。  
殊勝な心がけではある。青鈍の細長一襲、落栗色とかなんとか、昔の人が好んだ袷の袴一式、紫色が白っぽくなっている霰模様の小袿を立派な箱に入れて、美しく包んで贈ってきたのだった。  
文には、  
「お知らせ頂く数にも入りませんが、このような時はお祝いせずにはいられません。粗末なものですが、お付きの方にでも賜ってください」  
とおっとりしている。源氏は、それを見てあきれ、例によってまたかと思い、顔を赤らめた。  
「ごく昔風の人なのです。これほど引っ込み思案の人は、引きこもっているのがいいのです。さすがに恥ずかしい」として、「返事は出しなさい。気まずい思いをさせないように。父親王はたいへん可愛がっていたのを思うと、人より軽く扱ってはお気の毒です」  
と仰せになる。小袿の袂に、例の、同じ趣向の歌があった。  
（末摘花の歌）「わが身を恨みたくなります　唐衣の  
袂のようにいつもあなたの側にいられないので」  
筆跡は昔もそうだったが、ひどくちぢかんで、深く彫るように、強く、堅く書いている。